第59回
教育美術
佐武賞

現代美術とは何か？
～ 現代美術を理解し，自分なりの解釈で語るための授業展開の試み ～

《執筆者》小山 美香子
長野県伊那市立伊那中学校　教諭
（前任校：長野県駒ヶ根市立東中学校）

概　要

本研究は，生徒たちの価値の広がりを目的として，現代美術を「難しくてわからないもの」から，造形的な視点を持ち，自分なりの解釈で鑑賞できるようにしたいと願いを持って設定した題材の試みである。

著名な現代作家であるジャクソン・ポロックやピエト・モンドリアン等の技法スタイルを真似てみるところからスタートし，途中，実物と制作者を迎えた作品鑑賞することを通して現代美術を身近に感じ始めたところで，それぞれが気になった現代美術の作品を選定して鑑賞を行う。このような過程を経て，作品の造形的なよさや美しさを感じ取り，作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えることで，美意識を高め，見方や感じ方を深めることや，形や色彩，材料などの性質や，それらが感情にもたらす効果などを理解することに繋（つな）がるのではないだろうかと仮説を立てて実践を行った。

追体験と鑑賞をミックスさせた授業を通し，体験することで実感を伴った造形的な視点を持ち，最後に生徒たち一人一人が，美術とは何かを自分自身の言葉で語る。本研究は，それら一連の現代美術へのアプローチを中心に，実践によって得られた成果と課題をまとめた。

目　次

1．テーマ設定の理由

2．研究内容
（1）現代美術を知るために
（2）追体験から学ぶ
（ⅰ）ジャクソン・ポロック
（ⅱ）ワシリー・カンディンスキー
（ⅲ）ピエト・モンドリアン
（3）抽象絵画の鑑賞 ～制作者を迎えて～
（4）具体化と抽象化 ～国語科との協働授業～
（5）現代美術を自分の言葉で定義する

3．研究の成果と課題

1．テーマ設定の理由

現代美術，特に抽象作品は「わからない」と解釈されることが多く，生徒のみならず大人でさえも，その意味や価値がその作品の価格の高さのみで判断されがちだ。飛び散った絵の具や色面分割された画面は，誰にでもできる手法と捉えられ，そもそもの作品の価値にまで話が及びにくい。美術の授業は，具象で絵を描くという印象が依然として強くあり，形を正確に表現できないから美術は苦手とする生徒もいる。だが，もちろん美術の分野は広く，多岐に渡っていて，表現方法も多様である。折しも GIGA スクール構想によって一人 1 台端末が支給され，検索すれば多くの美術作品と出会うことができる状況にある。

本題材は，生徒たちの価値の広がりを目的として，現代美術を「難しくてわからないもの」から，自分なりの解釈が持てるようにしたいと願いを持って設定した。手法としては，作家の技法スタイルを真似てみるところからスタートし，途中，制作者を迎えた作品鑑賞することを通して現代美術を身近に感じ始めたところで，それぞれが気になった現代美術の作品を見つけて鑑賞を行う。このような過程を経て，学習指導要領の，「B 鑑賞」ア(ｱ) 造形的なよさや美しさを感じ取り，作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして，美意識を高め，見方や感じ方を深めることや，〔共通事項〕ア　形や色彩，材料，光などの性質や，それらが感情にもたらす効果などを理解することに繋がるのではないだろうか。[1]

追体験と鑑賞をミックスさせた授業を通して，最後に生徒たち一人一人が，体験することで造形的な視点を持ち，美術とは何かを自分の言葉で語る。本研究は，それら一連の現代美術へのアプローチを中心に，実践の試みによって得られた成果と課題をまとめて報告する。

2．研究内容

【第３学年対象・全７時間】〈学習の流れ〉

第１次　追体験から学ぶ（３時間）

作家の制作スタイルの追体験

（ⅰ）ジャクソン・ポロック

（ⅱ）ワシリー・カンディンスキー

（ⅲ）ピエト・モンドリアン

第２次　制作者を迎えた鑑賞（１時間）

第３次　個人追究（２時間）

〈この間に国語科との協働授業「思考のレッスン」を行う〉

第４次　発表及び相互鑑賞（１時間）

（１）現代美術を知るために

現代美術という言葉の捉えや定義は多様なため，本研究で取り上げた「現代美術」についての解釈は，本江邦夫著『中・高校生のための現代美術入門』（平凡社）[2] を根拠とした。本の副題にも使われている「●▲■の美しさって何？」に表されているように，わかりやすい幾何形体を使って，作品の構造に目を向けることができることや，抽象絵画を理解する上で欠かせないワシリー・カンディンスキーが抽象絵画に行きつくまでのエピソードが丁寧に紹介されていることからも，生徒たちにとって現代美術を解釈するための手がかりになった。現代美術に深くかかわる作家を生徒たちに紹介する際，本に載っている巨匠たち自身のエピソードや言葉を数多く紹介した。

（２）追体験から学ぶ

作家の制作スタイルを追体験する行為を通して体感的に現代美術を知ってもらおうという意図の元，作家自身の詳しいエピソード紹介を簡略化し，作家のスタイルを真似た追体験を行うところから授業をスタートした。

見ることとは？理解するとは？現代美術で考えよう！

体験しながら現代美術を考える美術の時間です。さあスタート！

図１　授業導入時に生徒に示したタイトル画面
（生徒のChromebookに送付した資料より）

（ｉ）ジャクソン・ポロック「アクション・ペインティング」

ドリッピングやポーリングと呼ばれるポロックの手法に，魅力を感じる生徒たちが多い。

授業前に生徒たちが美術室に入ってくると，机の上には既に赤や黄色のペンキが用意され，新聞紙で養生された机の上にはいつもの制作とは違った雰囲気がある。生徒たちからは，「何が起こるのだろう」とワクワクしていることが伝わってくる。

授業が始まり，１枚の作品を紹介すると，「何これ？」「これは絵なの？」と驚きの声が上る。ジャクソン・ポロックのオールオーヴァーの作品だ。ポロックの制作する姿の写真を見ると，「床で描くんだ」「いろいろなペンキをふりまいている」「面白そう」の声の中に「誰でもできるじゃん」という声も混ざる。

「それでは皆さんもポロックのように描いてみましょう」と言うと，恐る恐るペンキを垂らしてみる生徒もいれば，思い切ってペンキをぶちまけて，その上に更にペンキを垂らす生徒も現れる。何人かの思い切った表現をする姿に追随して，どんどんと積極的になっていく生徒たち。だんだんと制作する姿が変化していくのがわかる。最初に「誰でもできる」と言っていた生徒が，「うまくいかない」と口にする。「うまくいかないってどういうこと？」と問うと，「もっと強い感じにしたいんです。強く優しくをテーマにしているから」と答える。そこには偶然性に頼るのではなく，色と形で思いを表現しようと模索する姿がある。最初はこれは美術の作品なのか，ただの行為ではないのかと感じていた生徒たちが，思いを表現するためのドリッピングやポーリングという手法があることに気付いていく。追体験しないと出てこない気付きである。色と形がつくりだすイメージを感じることで造形的な視点が養われていく。（図２～４）

令和５年１０月５日

アクションペインティングを体験しよう！

図２　ペンキの上にペンキを垂らし込むポーリングの手法

図３　ペンキの流動性を利用している様子

図４　アクションペインティング追体験の作品と制作後の生徒の解説

不安な感じの黒を一番最初に大きくたらして，その後明るい希望みたいな感じの黄色を反対側に大きくたらして，他の色で塗ることでその間の緊張しているような感情を表現しました。

（生徒Ａの振り返り）

（ii）ワシリー・カンディンスキー「視点の変化」

夕暮れのことでした。わたしは外で制作したあと，絵の具箱をもってうちへ帰ってきました。[……] そのときでした。わたしはふいに壁の上に，内的（ないてき）な光でかがやく，いいようもないほど美しい絵がかかっているのに気づいたのです。[……] この謎（なぞ）のような絵に近づいてみても，形と色しかみえず，その内容についてはまったく見当がつきません。でも，じきにそのわけがわかりました。つまり，それは縦横を逆にしてかけられたわたし自身の絵だったのです。

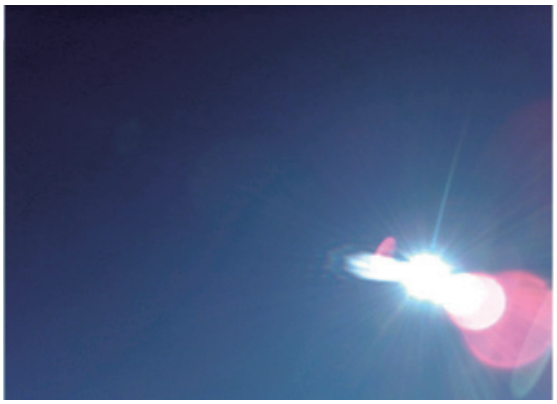
本江邦夫著『中・高校生のための現代美術入門　●▲■の美しさって何？』平凡社，2003，pp. 38-39[2] からの引用

カンディンスキーが自分の作品の見方を偶然変えた結果，「もの」が主役となる絵から離れていくきっかけとなった神秘的な体験である。

このストーリーを伝えたあと，生徒たちは Chromebook を持って美術室を出て行く。今回の授業は，校舎内外で撮った写真を回転させたり加工したりして元の写真とは違った表現をするというもの。カンディンスキーのように自分の描いた絵ではないが，写真を加工することで，視点を変えることができるのではないかと考えた。

「撮った写真を抽象的にしてみよう！」とタイトルをつけ，今回初めて抽象という言葉を使ってみた。生徒たちは写真を回転したり，反転させたり，クローズアップしたりと様々に加工し，見え方の違いを感じていた。（図5）

セミの抜け殻をカメラの前において太陽に向かって撮りました。



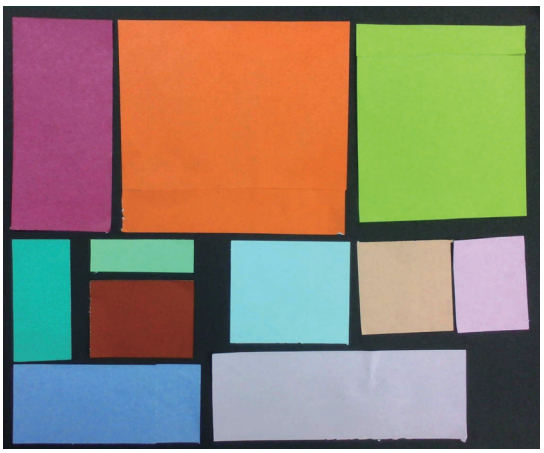
太陽の光を撮ってみました。左側のところがとても深い青になってきれいだなと思いました。

図５　「撮った写真を抽象的にしてみよう！」写真と生徒の感想

（iii）ピエト・モンドリアン「色面で感情を表す」

色面分割されたモンドリアンのコンポジションの作品からは，抽象ってこういうことかな？ とイメージしやすいのではないかと感じた。生徒たちには，モンドリアンの生い立ちや父との関係性を紹介し，モンドリアン自身が，厳格な父と自然とを同一視していた結果，生み出された作品であることを紹介した。

今回の授業では，自分の家の間取りを色紙を切って色面で表現しているが，その場所から感じる感情を色で表現しようと伝えた。自分が感じるリビングやキッチン，風呂場等のイメージをそれぞれが感じた色で表現している。色を決め出すといった単純そうに思えることも，実際に行ってみるとイメージを色に置き換えることに難しさを感じた生徒がいた。（次ページ 図６）



令和5年10月30日

我が家のモンドリアン風間取り！

色にこだわったところは，まずリビングです。みんなが集まる暖かい場所だと思ったので濃いオレンジ色にしました。キッチンは美味しそうな色・行きたくなるような場所なのでサツマイモのような色にしました。真ん中にある水色は階段です。家は金属のらせん階段でとっても冷たいのでこの色にしました。

（生徒の解説）

本題材は，「とがびアートプロジェクト」の中平千尋氏・中平紀子氏による美術科授業題材「モンドリアンでマドリアン」に着想を得た[3]

図６　「我が家のモンドリアン風間取り」作品と制作後の生徒の解説

（３）抽象絵画の鑑賞 ～制作者を迎えて～

Chromebook 等で鑑賞する作品は，画面越しなので，追体験をしても，どこか遠い世界になりがちだ。そこで本物の作品を観て鑑賞する機会をつくりたいという願いを持ち，今回の授業では，地域で活動をしている制作者の寺井茉莉子氏から作品『踊る』（油彩，F100 号，2023 年制作）を借りて授業を行った。制作者も授業に参加し，生徒が制作者の思いを想像し，制作者の言葉を受け取る相互鑑賞の授業である。

学習課題
「作品が描かれた世界を６つの手がかりで読み解こう」

☆６つの手がかり
- 想像力を働かせる
- 出来事を考える
- 自分の見方で見る
- 何を言っているのかを想像する
- 絵の中に入ってみる
- 何が問われているのかを考える

上野行一「美術鑑賞を楽しむ６つの手がかり」，光村図書『みつむら webmagazine』[4] からの引用

ステップ１　まずは，自分が感じたことを書いてみよう！
絵からキーワードを探してみよう（図７）

ステップ２　班の皆と考えをミックスさせてプレゼンシートをつくろう（図８）

ステップ３　各班の発表
（役割分担を話し合って発表しよう）（図９）

ステップ４　制作者の方のお話を聞こう（図 10）

ステップ５　感想を記入しよう

図７　ステップ１の場面
作品についての所感を６つの手がかりで書いていく

- 背景が青だから，空とか海とかなのかな。
- 流れている感じ，曲線。
- 鮮やか，きれい，さらさらしている。
- 形がのびて変化している様子。
- のびのびと，何にでもなれる様子。

図８　ステップ２の場面　それぞれの班でお互いの考えをミックスさせていく

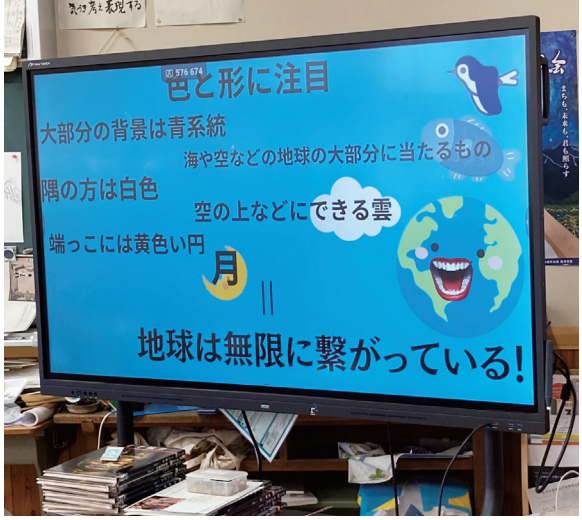


図９　ステップ３の場面　プレゼンシートを使ってそれぞれの班が発表を行う

☆ A 班の考察と結論

人が魚を捕まえていて，ヨットが海に浮かんでいるように見える。ろくそくなどもあり，自然の中の生活のように見える。形にとらわれていないところや絵のサイズ感の感じから自由や自然の大きさを表している。空の上でのびのびと変化しているからなんにでもなれるということかな。様々な生命がいる自然界のように見える。

☆ B 班の考察と結論

結論①　海の中に見える，白いのが泡，人魚や人や魚がいる → 竜宮城に見える。

結論②　背景が青色，白い物が雲，人がいて踊っているように見える。
鳥がいて歌っている → ダンスパーティしている。

寺井氏が自分の作品について語るとき，生徒たちは当初，自分たちの解釈の答え合わせをするような気持ちでいたが，話が進むにつれて，制作者自身が自分の作品について全てを知っているわけではないことに，生徒たちからは驚きの声が上がった。描き出しは具象からスタートしていること，描いている内にどんどんと形が変化していくこと，その時に聴いている音楽によっても変化は訪れること。また，生徒たちの鑑賞を聞いている中でも制作者自身が作品の新たな面を知ったこと。制作者と鑑賞者はお互いに影響を与え合う存在であることに生徒たちは気付き，驚き，抽象作品の持つ自由さと魅力を感じていた。

図 10　ステップ４の場面　制作者・寺井氏の言葉を聞く

生徒の感想

- 抽象を描こうとして描いていないけれど，抽象になったというのに驚いた。
- 美術作品は創る人だけの作品ではないと思った。
- 現代アートは本当にたくさんの考え方や見方があって魅力を感じる。
- 作者も描きながらつくり，完成するまでわからないと聞き，驚いた。
- 作者が私たちの感想からまた新たな発見をしている様子を見て驚いた。

（4）具体化と抽象化 ～国語科との協働授業～

一連の現代美術との出会いを経て，生徒たちの見方考え方が少しずつ変化しているのを感じている。生徒たちが造形的な視点を持ち始め，色と形がつくりだすイメージが感情と結びついているのを理解しようとしている姿が見られた。更に抽象を理解するための手立てとして，国語科と協働する授業を展開した。

思考のレッスン「具体化と抽象化」は，具体と抽象の違いを学び，「抽象化」することのレッスンを含んだ題材である。国語科の教科書[5]の資料には，「色や形，性質など，さまざまな観点で抽象化することができる」とあり，美術科の授業を想起させる言葉が多い。生徒たちは，「平和，素直，勤勉，不可欠，圧倒される，我を忘れる」等の言葉から選び，その言葉の意味を，「例えば」という言葉を使って具体例を挙げながら説明する，「具体化」から練習を行った。「平和とは，例えば，おいしそうなケーキがあっても奪い合わずに分け合うことである」「圧倒されるとは，例えば，大きな建造物を目の当たりにした時に感じる気持ちである」等，具体的な場面を想起しながら具体化を考えて文章にした。その後は「抽象化」の練習を行った。文章を読んで，その文を「このように」という言葉から続く文にまとめる。更に比喩を用いて抽象化すると，「〇〇はまるで△△のようだ」という文章になる。最後のレッスンは，「具体化」して「抽象化」し，端的な言葉で状況を表現した。

テーマ：「努力」
「具体化」して「抽象化」する思考のレッスン

① 「努力」に関する具体的なエピソードを挙げる。
（例）→夏休み中，毎日暑い中でも練習して陸上競技の大会に出場して自己ベストを出した。

② ①で挙げたエピソードを抽象化して，自分の考えを一言で書く。
（例）→暑さと自分に負けないこと。

③ ②を更に抽象化して，「努力とは〇〇である」という形でまとめる。
（例）→努力とは，自分に負けないことである。

この国語科の実践は，現代美術を直接考えるわけではないが，教科を横断して緩やかに繋がりながら具体や抽象を考え，思考のレッスンを通して，言葉としての抽象表現を習得することができた。

（5）現代美術を自分の言葉で定義する

本題材のまとめの場面では，生徒がそれぞれ気に入った作品を探し，検索したり自身で考察したりしながら，「現代美術とは〇〇である」「見るとは〇〇である」「抽象とは〇〇である」と自分の言葉で定義するところをゴールとした。

Chromebook で作品を探す場面では，追体験で扱ったジャクソン・ポロックから調べ始める生徒が多くいたが，だんだんと古今東西の作家に広がっていった。なかには，現代の日本人作家を中心に調べる生徒もいて，アートシーンでの日本人の活躍がどのように展開しているか調べたり，サブカルチャーから発展した作品に興味を惹（ひ）かれている生徒もいた。作品や作家を決めると，考察を加えてプレゼンシートをつくる。発表する時間は一人１～２分間。発表の最後に自分なりの言葉で，現代美術・抽象・アート・美術を定義した。（図 11・12，20 ページ図13）

生徒たちは自分が選び，考察した内容を Chromebook から拡大投影機に映しながら発表した。選んだ作品は多岐に渡り，中には同じ作品を選んだ生徒もいるが，視点や考察が違うので，考察の違いをお互いに質問し合って，

図 11　発表の場面

更に鑑賞が深まる場面も見られた。

色と感情の繋がりについて考察した生徒は，色によって想起する感情に幅があることに気付き，黒という色に絶望を感じる人もいれば，希望を感じる人もいることを紹介した。制作者と鑑賞者の感じ取り方の違いを挙げて，作品は誰のものなのかを考察した生徒もいた。

現代美術を調べると出てくる画像のほとんどが，抽象的な感じになっているため，僕は，現代美術というのは，「何かしら伝えたいことを抽象的に伝える」ということだと思います。

なぜなら，追体験したポロックの描き方では，ペンキのかけ方や色によっていろいろなことを伝えられると思ったからです。他にも，カンディンスキーだったら，色を変えたり，向きを変えることによって一つの写真を，様々な意味に変えたりもできます。モンドリアンだったら，四角の大きさや色付けなんかで「どんな意味があるかな？」と考えることもできます。

他にも調べてみると，なにか一つのものに，抽象的な色付けをしたものや，大きくいっぱいに描いたものなどいろいろあり，「これはこういうものなんだな」とはっきりわかりそうなものはあまり見当たりませんでした。

そんな中で僕が気に入ったものはカテランの《Comedian》です。

なぜこれが気に入ったかというと，「バナナをダクトテープで壁に貼ろう」とう発想が面白かったからです。僕はこの作品にどんな意図が込められているかはわかりませんでした。そのためネットで調べていたら，このバナナが食べられてしまったとありました。しかし，作者のカテランは別にこのことに怒ったりしなかったそうです。さらに，食べた人が「これもアートだ」といっていて，現代美術は奥が深いと思いました。

これらのことから僕は現代美術は，「何かしら伝えたいことを，抽象的に伝える」ということだと思いました。

マウリツィオ・カテラン《Comedian》2019年
https://www.perrotin.com/art-fairs/art-basel-miami-beach/8200

これまで，現代美術を３つ体験してきました。カンディンスキーのようにものの見方を変えた美術であったり，ただ角々しているようにも見えてしまうモンドリアン，ただ絵の具をぶちまけただけ？ と感じてしまいそうなポロックだったりと，体験してみたことで，より自由だなぁ，様々だなぁと感じました。個性が出る作品で自由で，体験してみて，楽しかったし，友達の作品を見ても十人十色という感じで面白かったです。

この作品を見たことありますか？　この作品は村上隆さんが描いたものです。

私がこの作品を知ったきっかけは，ドラえもんとコラボした時にドラえもん展に行ったことです。その時はなんかかわいいお花だなぁと思っていましたが，今回，このレポートを機に調べてみると，1945年に広島と長崎に落とされた原子爆弾からインスピレーションを受けてつくられたお花たち。幸せによって笑顔はつくり出されるが，よく見ると笑顔の裏に隠された涙を感じる。「絶望の恐怖から笑顔の花に繋げる」という村上隆さんのメッセージが込められていることを知りました。これを知って，深いなぁと思ったと同時に，そう思って見ると，元気が出るような，悲しさも感じるような作品だなと感じました。

以上のことから，現代美術とは，自由さや不思議さを感じさせるとともに，悲しさや笑顔＝元気なども与える力がある，そんなものなのではないかと私は考えました。

村上隆《おはなちゃん，かわいいね》2010年
https://www.tagboat.com/products/detail.php?product_id=37183

図 12　生徒による美術レポートより

図 13　生徒たちが考えた定義

3．研究の成果と課題

授業後のアンケートから，現代美術を身近に感じ，見方の変化を実感している生徒たちの姿が浮き上がってくる（図 14）。生徒たちは一連の現代美術との出会いから，価値が広がり，新しい視点を持つに至り，美術科の授業を介して生活の中や社会の中の美術や美術文化を理解しようとしている。今までは，「難しい，わからない」と思いがちだった部分に風穴を開けて，理解しようとする姿が見られるようになった。「芸術とは」「抽象とは」を，

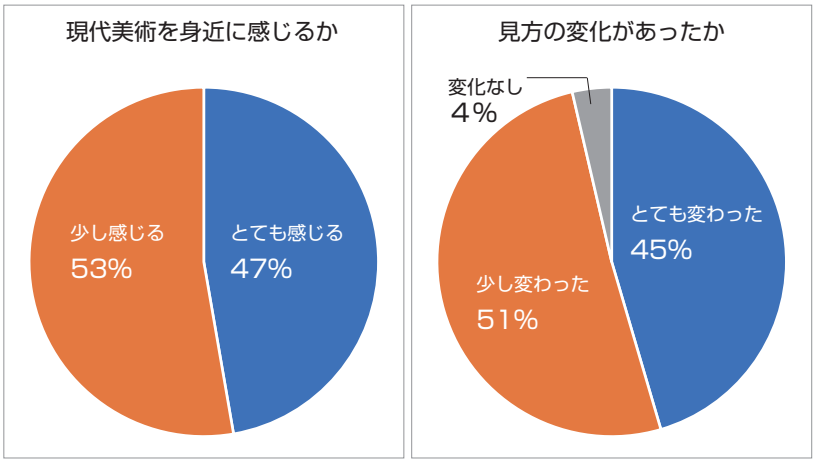


図 14　授業後のアンケート集計

自分なりの言葉で生き生きと語る姿にそれらの成長が顕著に現れている。

ジャクソン・ポロックの追体験の感想には，「最初は特に目的もなく色をばらまいていましたが，自分なりの目的ができた時に，それを表現しようとしてもペンキが思うように落ちてはくれなくて，太くなったり細くなったりで，難しさを感じました。だから気に入らないと思ったけれど，今思うと，気に入らないって言葉良いですね」と記入している。制作の意図を持つことを，追体験をすることで実感を伴って感じたことは深まりがあり，「気に入らない」と思えたことにも喜びを感じている。

また，制作者を迎えて鑑賞した場面では，友達の意見から考えを広げたり深めたりする姿があり，振り返りに「言われてみれば確かにと思うことも多くて，自分一人の鑑賞では難しかったと思います。いろいろな班の発表を聞いて，それぞれの班が違う視点で見ていて，そういう見方もあるのか，面白いなと思いました」とあり，グループになって協働鑑賞をすることで，お互いに意見を交わしながら鑑賞を深めることができたことがわかる。単元最後の感想には，「現代アートは本当にたくさんの考え方や見方があって，そこが魅力だなと思いました」「美術は想像力が一番試される教科で，様々な考えや行動が作品に現れる。とても楽しい授業だった」「考えることがとても楽しい時間だったと思う。自分を表現することに終わりはないということを実感した」との記述があった。

筆者はいつも感じていることがある。中学３年生は義務教育最終学年であり，必修で美術科授業を受ける最後の年となる。ほとんどの生徒は高等学校へ進学し，選択教科で美術を選択しなければ美術教育を受けることは生涯ないと言っていいだろう。その最後の年に，生徒たちにどのような種まきができるだろうかといつも考える。深遠な芸術世界を少しでも理解してほしいとも願うが，見方や感じ方を美術の授業で広げ，世の中や社会，自分の中にある芸術的な視点に気付いてほしいと願っている。描くこと，創ることに苦手意識があっても，美術と繋がることはできることを本題材で生徒たちに伝えてきた。最後の授業の感想の中に興味深い記述があった。

３年間の美術の中で，たくさんのことを知り，学び，取り入れることができました。ここで色をどう使うかとか，こういうときにどう表現するかとか，立体なら，平面なら，レポートなら… という感じで，絵の上達というより，芸術の感性を手に入れることができました。自分は現代美術が一番心に残っていて，正しいかはわからないけれど，それをつくった人と見る人では感じ方が違っていいし，目にした人全員が芸術家になれるところがとても面白いと思いました。

「芸術の感性を手に入れる」という表現が興味深い。この言葉は，美術教育とは何かと，その意味を問うた時，担う役割の大きさを示しているのではないだろうか。

最後に，課題について触れたいと思う。課題と感じたのは，生徒自身の言語力である。感じたことや考えたことを言語化する力の育成にはまだまだ課題があると感じた。それは美術教育だけの課題ではなく，教科を横断して生徒の言語力向上に努める必要がある。造形的なよさやイメージを捉え，それを表現するためには言語化の力が不可欠である。今後は，他教科と繋がりながら言語力育成に力点を置き，研究及び実践を続けていきたい。

（こやま・みかこ）

【注】

1 文部科学省「中学校学習指導要領（平成29年告示）第2章　第6節　美術（pp. 107-114）」https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf（2024年7月1日アクセス）

2 本江邦夫『中・高校生のための現代美術入門　●▲■の美しさって何？』，平凡社，2003，pp. 38-39

3 茂木一司編集代表・住中浩史・春原史寛・中平紀子＋Nプロジェクト編『新版増補 とがびアートプロジェクト』，東信堂，2021，pp.76-77

4 上野行一「美術鑑賞を楽しむ6つの手がかり」『みつむら web magazine』，光村図書 https://www.mitsumura-tosho.co.jp/webmaga/jugyou/kansho（2024年7月1日アクセス）

5 令和６年度版　中学校教科書　光村図書
国語２「思考のレッスン１　具体と抽象」，pp. 52-53
国語３「思考のレッスン　具体化・抽象化」，pp. 50-51

【参考文献】

- アメリア・アレナス（福 のり子訳）『なぜ，これがアートなの？』，淡交社，1998
- 監修：福田隆眞，福本謹一，編集：東良雅人，村上尚徳，山田芳明『美術科教育の基礎』，建帛社，2024